

遠山荷塘年譜稿

樊 可 人

はじめに

遠山荷塘は、江戸時代後期の人。法名は松陀、円陀という。字は一圭、別号として一溪、一嘯道人がある。大分で広瀬淡窓に弟子入りし、長崎で唐話と清楽を学んだ。のちに江戸に移ると、朝川善庵らに『西廂記』などを講義した。僅か三十七歳で亡くなり、東京の長命寺に葬られた。著作として『諺解校注古本西廂記』のほか、『月琴考』、『胡言漢語考』がある。

遠山荷塘の事跡については、すでに徳田武氏の論文「遠山荷塘と亀井昭陽」(『明治大学教養論集』第二二三号、一九八九年)、「遠山荷塘と広瀬淡窓」(『明治大学教養論集』第二三二号、一九九〇年)に言及されている。また、拙稿「『荷塘道人圭公伝碑』訳注稿」(『中国学研究論集』第三二号、二〇一四年)でも、朝川善庵が作成した墓誌銘に言及された人物などについて些か考察を加えた。ただし、徳田氏の論文は、それぞれ亀井昭陽と広瀬淡窓を中心に作成されたものであり、遠山荷塘の事跡については、なお補足できる箇所が少なからず存在する。そこで、徳田氏の論文を参照しつつ、広瀬淡窓の『淡窓日記』や亀井昭陽の『空石日記』などの遠山荷塘に関する資料を用いて、遠山荷塘の年譜を作成することにした。

出典は原則として旧字体を用い、解釈は原則として常用字体を用いる。また、出典の中で亀甲括弧で表示するものは、原文の注に当たる。

寛政七年 乙卯 一七九五 誕生

○ この年、陸奥石巻(宮城県)に誕生。

○ 師諱圓陀、初名松陀、號一圭、又號荷塘道人。姓遠山氏、陸奥人。〔樂我室遺稿〕卷三「荷塘道人圭公伝碑」

文化八年 辛未 一八一七 十七歳

○ この年、出家を決心し、石巻の禪昌寺の住職に従って信濃に向かい、途中で出家し、諏訪にある温泉寺の願王和尚のところに身を預け、具足戒を授かって僧になり、参禅し禅学に励む。

○ 年十七、決志出家、從石巻禪昌寺住持僧至信濃、途中落彩、投諏訪温泉寺願王和尚、受具得度、参究禅學。〔樂我室遺稿〕卷三「荷塘道人圭公伝碑」

文化十三年 丙子 一八一六 二十二歳

○ この年、各地を遊歴し、修行に励む。

○ 年二十二、遊方徧參道公益勵。其行脚所至、遇住持首座開堂、必横機聘辭。深微鋒出、一衆爲之靡然。〔樂我室遺稿〕卷三「荷塘道人圭公伝碑」

文化十四年 丁丑 一八一七 二十三歳

三月八日、広瀬淡窓の塾に入門し、大超寺に住む。

○ 信濃僧圓陀入門。〔居大超寺。〕〔淡窓日記〕卷八)

三月十四日、広瀬淡窓の入門簿に登録される。

○ 入門年月日 住所 氏名 紹介者

文化十四丁丑 信陽諏方鷺湖 温泉寺 徒一溪 大超寺超然

春三月十四日 城下 〔入門簿〕卷八)

三月二十七日、法名を円陀から一溪に改め、月旦評では入席に位置づけられる。

○ 改月旦評。(中略) 一溪(中略) 入席。〔一溪、圓陀改稱。〕〔淡窓日記〕卷八)

※ 月旦評とは、咸宜園で月の初めに門生の学力を客観的に評価する制度である。下位の一級から上位の九級まで、各級上下に分かれている。級を上げるためには試験に合格する必要がある。門生の成績を公表することで彼らを勉学に励ませた。なお、この入席が一番低い階級である。

六月一日、入席から一級下に席次が上がる。

○ 改月旦評。(中略) 一溪加一級下。〔淡窓日記〕卷八)

六月二十七日、一級上に上がる。

○ 改月旦評。(中略) 一溪加一級上。〔淡窓日記〕卷八)

八月二十六日、二級下にする。

○ 改月旦評。(中略) 一溪加二級下。〔淡窓日記〕卷九上)

十月二十三日、油原山の太宮司に会い、太宮司から淡窓に見せる詩を託される。

○ 一溪寄示油原山太宮司某所作詩。〔淡窓日記〕卷九上)

※ 油原山太宮司とは現在大分県大分市上八幡三組にある柞原八幡宮の太宮司のことを指す。

文化十五年 戊寅 一八一八 二十四歳

二月二十日、病にかかった先生を見舞うために一旦退塾する。

○ 一溪來見。告以師疾歸國。〔淡窓日記〕卷十)

二月二十五日、月旦評では、除名される。

○ 改月旦評。(中略) 一溪(中略) 除名。〔淡窓日記〕卷十)

文政二年 己卯 一八一九 二十五歳

四月二十一日、再び淡窓を訪れる。

○ 釋一溪來見。〔淡窓日記〕卷一一)

四月二十六日、月旦評では再び入席に位置づけられ、また「客席」を加えられ特別の扱いを受ける。

○ 改月旦評。(中略) 一溪(中略) 入席。〔一溪客席〕〔淡窓日記〕卷一一)

※ 客席について、天保七年二月に咸宜園に入門した武谷祐之の『南柯一夢』天の巻に、「又客席ト称シ欄外署名ス、公務家業ニ係リ志アリテモ在塾ノ生徒ト学場勤惰ヲ異ニスルモノハ焉ニ署名ス。都講、副監、主簿等ニテ長ク塾務煩勞ニ任スルモノハ退帰ノ后モ一周歳ハ客席ニ署シ其ノ勞ヲ頭スナリ。」とある。

七月五日、中島米華が筑前の亀井昭陽の塾に入門するために淡窓の塾を去る。荷塘は、頼之とともに祝原村まで中島米華を送って行く。

○ 益多之筑前、謁龜井先生、送到石橋。内外書生送者殆三十人、餞於萩尾。頼之、一溪獨至祝原。〔淡窓日記〕卷一三上

※ 益多は門生の中島米華、頼之は門生の司馬太。祝原は現在の日田市大字夜明の一带にあたる。また、亀井昭陽を訪れることについて、『懐旧樓筆記』卷一九に「初メ予教授ノ事ヲ始メシコト、自ラ人ノ師トナルニ足レリトスルニハ非ズ。童幼無知ノ輩ヲ導キテ、少シク文義ニ通ゼシメ、小成ノ後ハ、筑ニ至リテ、先生ノ門ニ入ラシムルコト、コレ素願ナリ。」とある。

七月七日、祝原村から淡窓塾に戻って来るが、塾内には宿らずに、岳林寺に泊る。

○ 一溪歸塾、寓岳林寺。〔淡窓日記〕卷一三上

七月九日、淡窓の塾に起居するようになる。

○ 一溪歸塾。〔淡窓日記〕卷一三上

九月一日、塩山屯が秋風庵に移住し、退塾して故郷に帰ることを淡窓に請う。淡窓は荷塘と岡子宛に、彼を止まらせるため説得させる。

○ 屯移居秋風庵、請大歸。一溪、研介止之。〔淡窓日記〕卷一三上

※ 屯は門生の塩山屯のことだと考えられる。秋風庵は、淡窓の叔父、平八の号、またはその居所の名である。後に淡窓が塾の建物として利用した。研介は後に蘭学者者として知られる岡子宛のこと。

九月二十二日、淡窓に筑後に行くことを告げる。

○ 夜一溪以之筑後告。〔淡窓日記〕卷一三上

九月二十九日、塾に戻る。

○ 一溪歸塾。〔淡窓日記〕卷一三上

十二月二十四日、塾を去り、岳林寺に泊る。

○ 一溪去塾、寓岳林寺。〔淡窓日記〕卷一三上

文政三年 庚辰 一八二〇 二十六歳

一月七日、塾に戻る。

○ 一溪歸塾。〔淡窓日記〕卷一四

一月二十四日、頼之の代わりに講師を任せられる。

○ 使一溪代頼之攝講師。〔淡窓日記〕卷一四

※ 『淡窓日記』卷一四、同年二十一日の条に「頼之以祖父疾去塾。」とある。

一月二十九日、広井圭助が日田に来訪し、荷塘は十六人の門生と一緒に宴に参加する。

○ 長門清末人廣井圭助來訪。(中略)是日、會門生後至者觴之。凡十七人。(二溪(後略))〔淡窓日記〕卷一四

※ 広井圭助について、『淡窓日記』卷十六、文政四年四月六日の条に「長門清末儒官廣井孫兵衛(圭介父)」とある。

三月二十八日、病気のため、一旦塾を去る。

○ 一溪以疾去塾。〔淡窓日記〕卷一四

三月二十九日、塾に戻る。

○ 一溪歸塾。〔淡窓日記〕卷一四

四月四日、七十人の門生たちと一緒に代官に拝謁する。

○ 府君有命、使悉率内外生徒到府。凡七十一人。(中略)一溪(後略)賜茶及餅。既畢而拜謁、賦詩以呈者十六人。(『淡窓日記』卷一四)

○ 明府命アリ。予カ門生二相見有ル可シトノ事ナリ。因ツテ内外ノ生徒ヲ卒キテ、官府二赴ケリ。凡七十一人ナリ。禮謁已ニ終リテ、茶及ヒ餅ヲ賜フ。歸ツテ後、又酒肴ヲ塾ニ贈リ玉ヘリ。此日晝生席上ニ於テ詩ヲ賦シテ呈スル者アリ。翌日明府命アリ。改メ書シテ一幅トナシテ、差出ス可シトナリ。因ツテ十八人ノ詩ヲ合セ、一幅トナセリ。書生官府二往キ、明府二謁見スルコト、此ノ時ヨリ始レリ。(『懷旧樓筆記』卷二〇)

※ 明府は、日田の代官である塩谷大四郎正義のこと。

四月五日、代官屋敷に行つて、馳走の挨拶をする。

○ 府君有命、使以昨所賦詩、寫爲一幅進呈。(詩皆自書、追加者二人、通十八人。他五十三人皆自書姓名。)既畢、皆到府謝。(『淡窓日記』卷一四)

四月九日、門生の代表として代官屋敷に印石をもらいに行く。

○ 府君賜印石於塾生十餘輩。使一溪、一九郎詣府謝。(『淡窓日記』卷一四)

四月十八日、中島米華らとともに肴と酒のご馳走にあずかる。

○ 午後、助作父齋鮓及酒至。請嚴君、伯母同食。既而招益多、一溪飲。至暮而散。(『淡窓日記』卷一四)

四月二十四日、佐藤玄猷の誘いに応じ、詩会に参加する。

○ 赴佐藤玄猷招。會方山元台後園新居。(名孤鶴横江舎。)會者、益多、謙吉、一溪(中略)。日入而歸。(『淡窓日記』卷一四)

五月二十日、詩会に参加する。

○ 蒲池久市偶至。因招佐藤玄猷、及益多、謙吉、一溪(中略)同會賦詩。未暮而散。(詩會不用飲食、以此會爲始。)(『淡窓日記』卷一四)

六月十三日、詩会に参加する。

○ 會草堂。會者益多、謙吉、无爲、賴之、一溪(後略)。(『淡窓日記』卷一四)

六月十四日、塩谷代官の食事の招きに応じ、合原善三郎の家に行く。

○ 藤府君賜飯於塾生於合原善三郎家。凡三十四人。(益多、无爲、賴之、屯、一溪(後略)。)(『淡窓日記』卷一四)

七月四日、詩会に参加する。

○ 會艸堂。會者益多、謙吉、无爲、一溪(後略)。(『淡窓日記』卷一五)

七月十一日、岳林寺に行く。

○ 一溪、朝宗去塾。(之岳林寺、護願寺也。)(『淡窓日記』卷一五)

七月二十二日、塾に戻る。

○ 一溪、永祐歸塾。(『淡窓日記』卷一五)

八月十二日、詩会に参加する。

○ 會艸堂、謙吉、无爲、一溪(中略)、向暮而散。(『淡窓日記』卷一五)

九月三日、塾を去り、岳林寺に泊る。

○ 一溪去塾、寓岳林寺。(『淡窓日記』卷一五)

九月二十日、塾に戻る。

○ 一溪歸塾。〔淡窓日記〕卷一五)

九月二十六日、岳林寺に行く。

○ 一溪之岳林寺。〔淡窓日記〕卷一五)

九月二十八日、塾に戻る。

○ 一溪歸塾。〔淡窓日記〕卷一五)

十月二十六日、四級上に上がる。

○ 一溪加四級上。〔淡窓日記〕卷一五)

十一月四日、詩会に参加する。

○ 已牌、會蒲池久市宅。益多、无爲、一溪、亨、研介、並衛、頼母、
〔和市政稱〕泰助從焉。謙吉、頼之、僧虛白亦來會。日入返家。〔淡
窓日記〕卷一五)

十一月二十八日、雪見をしながら、会食に参加する。

○ 朝起、雪壓園林、簷懸氷柱。山野皓白、與朝光相射、景太佳。嚴
君來賞雪、供飯。遂招益多、一溪、伯父、夜同供蕎麥、二更而散。
〔淡窓日記〕卷一五)

十二月二十三日、塾から岳林寺に行く。

○ 一溪去塾、寓岳林寺。〔淡窓日記〕卷一五)

この年、四人の僧侶を咸宜園に紹介する。

○ 入明年月日 住所 氏名 紹介者
文政三年庚 周防國三田尻 淨福寺 釋一溪
辰三月念三日 中之關 惠觀

文政三年庚 尾張國春日井 廣福寺朝宗 釋一溪

辰三月念三日 郡山田村

文政三年庚 筑前博多御供 聖福寺子屯 釋一溪

辰三月十四日 所町

文政三年庚 加州河北郡金 傳灯寺元琳 釋一溪

辰七月廿九日 澤

〔入門簿〕卷一二)

文政四年 辛巳 一八二一 二十七歳

一月二十六日、淡窓に別れを告げる。

○ 夜、一溪來告別。大歸也。贈以韋蘇州詩鈔一本。〔一溪本奥人也。
入信爲僧、雲游而來海西、入我門五年。而受教之日唯二年已。有才辯
風度、衲子中之傑然者。予於塾生、命屯、一溪、研介爲三長者、幹理
衆務。今失其一、惜也。〕〔淡窓日記〕卷一六)

○ 二十六日。僧一圭別レヲ告ゲテ去レリ。初メ予、屯・一圭・研介
ヲ以テ、三長者ト名付ケ、都講ノ副トナシテ、塾政ヲ調和セシム。一
圭尤モ事ニ幹タルノオアリ。其去ルニ及ンデ、殆ド左右ノ手ヲ失フガ
如シ。〔懷旧樓筆記〕卷二二)

二月七日、客席に移される。

○ 一溪轉客席。〔淡窓日記〕卷一六)

この年から、長崎に遊学する。

○ 無幾、去往長崎、卓錫於崇福寺。時年二十六。師素通悉曇之學、
兼精聲律。於是學唐話於譯司周某。未數年、土音方言莫不通曉。又聞
姑蘇李鄴嗣精於音樂、閩中徐天秀妙於梵唄、亦從學之、皆究其精妙。
時又有金琴江者善月琴、師盡傳其指法。與江芸閣、朱柳橋、李少白、
周安泉諸子交最親。源源接談、又數以篇章往來。其傳奇詞曲之學、蓋

得諸其間云。他若鼓笛箏琶諸技、皆從心悟、不必假指授。在崎五年餘。
〔樂我室遺稿〕卷三「荷塘道人圭公伝碑」
○ 長崎にいたり墮落して清朝の語學を覺へ〔増訂武江年表〕卷之八

文政七年 甲申 一八二四 三十歳

五月十一日、岡研介の紹介状を持ち、亀井昭陽を訪れ、月琴の技を披露する。

○ 研介東介一圭。始聴月琴。〔空石日記〕卷一七

五月十二日、また月琴の技を披露する。

○ 辰十郎、道革、宰吉来酒之、呼一圭弹琴。〔空石日記〕卷一七

五月十四日、昭陽のもてなしに対し、お礼を言いに行き、昭陽から書齋を借りる。

○ 講後、作歌行謝一圭（中略）左大夫、勘介、狙三、宰吉来飲。一圭亦来、謝昨之齋供、奠白檀、唐蠟。宰吉欲留圭學『鏡韻』、乃假之我書舎、命儀助房錢〔三宿、四百五十文〕我辨之、勿責上人。塾狹、始開北樓。〔案、この『鏡韻』は『韻鏡』の誤写だと考えられる。〕
〔空石日記〕卷一七

五月十五日、村北海に悉雲の学を授ける。

○ 宰吉来學悉曇。〔空石日記〕卷一七

五月十七日、左大夫の招きに応じる。

○ 夜与圭師赴左大夫請。〔空石日記〕卷一七

五月二十二日、昭陽からあんべらのむしろをもらう。

○ 安扁羅席圭師。〔空石日記〕卷一七

五月三十一日、目連戲を紹介する。

○ 圭師話唐人目連搬戲。〔空石日記〕卷一七

六月一日、昭陽から二首の詩をもらう。

○ 作詩二首贈圭師。〔空石日記〕卷一七

六月七日、昭陽の長子義一郎と一緒に左大夫を訪れ、渾天儀についての話を聞く。

○ 義也、圭師如左大夫、聴其談渾天儀。〔空石日記〕卷一七

※ 義也は昭陽の長子義一郎のこと。左大夫は「送一圭上人序」に見える原鸚武のことだと考えられる。

六月十一日、また月琴の技を披露する。

○ 夜、源八郎之母、妻、従母、以二婢来、聴月琴過夜半。〔空石日記〕卷一七

六月十四日、博多に行く。

○ 圭師、二児、二女、書生、皆如博多。〔空石日記〕卷一七

六月二十二日、昭陽の長子義一郎と一緒に崇福寺に遊びに行く。

○ 義也与圭師遊崇福寺。〔空石日記〕卷一七

※ 崇福寺は現在の福岡市博多区にある臨濟宗大徳寺派の寺院である。山号は横岳山。

七月五日、左大夫と『水滸伝』について論じる。

○ 左大夫載酒質疑『水滸傳』於圭師。（中略）圭師云、唐人所謂下戸者、小盞八九皆飲、無不能濡吻者。〔空石日記〕卷一八

七月九日、聖福寺に遊びに行く。

○ 圭師遊聖福寺。(『空石日記』卷一八)

※ 聖福寺は、現在の福岡市博多区にある臨濟宗妙心寺派の寺院である。山号は安国山。

七月十二日、昭陽の亡くなった息子、修三郎の像に唐音で経文を唱える。

○ 夜、圭師夏音諷經於神童像前。(『空石日記』卷一八)

七月十三日、また経文を唱える。

○ 夜、圭師夏音諷經於神童像前。(『空石日記』卷一八)

七月十五日、月見の飲み会で月琴を弾く。

○ 滿月初明、賞飲于蒲廬東涯、圭師弹琴。(『空石日記』卷一八)

七月十八日、昭陽と一緒に彼の次女、敬の嫁ぎ先の家を訪れる。

○ 夜、与圭師、二兒適敬氏。余終夜不寐在灯下。(『空石日記』卷一八)

七月二十三日、昭陽に『難字抄』を貸す。

○ 借圭師難字抄登之。譯通格上、頗費氣力、然得益甚多、不能自休。(中略)夜抄録至寅夜、卧即起、灯下又抄、遂畢。(『空石日記』卷一八)

七月二十四日、昭陽に『乾隆上諭』と『長崎二十一条款』を貸す。

○ 圭師見借『乾隆上諭』及『長崎廿一條款』、又抄。(『空石日記』卷一八)

七月二十九日、亀井昭陽と岡研介の前で月琴の技を披露する。

○ 与研介聽琴。(『空石日記』卷一八)

八月三日、昭陽の妻、伊智のために地藏像を彫刻する。

○ 圭師為内氏刻地藏尊。(『空石日記』卷一八)

八月四日、修三郎の冥福を祈るために地藏像を彫刻する。

○ 圭師、又為孝鳥追福刻地藏尊。(『空石日記』卷一八)

八月五日、昭陽に『韻鏡發蒙』を校訂してもらう。

○ 圭師、以其著『鏡韻發蒙』乞剋正。【案、この『鏡韻發蒙』は『韻鏡發蒙』の誤写だと考えられる。】(『空石日記』卷一八)

※ 『韻鏡發蒙』について、『昭陽先生文集初編』卷二「申贈一圭上人序」に「上人之将去、写其所著課『韻鏡發蒙』者、請余點定其文辭之協否。我未嘗有聞音韻之学。困而閱之二日二夜、終不能得曆一辞其所發明之秘蘊也。」とある。

八月十四日、長崎から来た客人に会うために、博多まで行く。

○ 圭師如博多。崎客來故也。(『空石日記』卷一八)

八月十五日、博多から帰る。

○ 為圭師貽線麵於崎客(直六百文)。(中略)圭師帰、携明月糕、花眼肉、□□□、二兒聽琴飲。(『空石日記』卷一八)

八月二十二日、昭陽から詩を贈られる。

○ 作贈圭師詩。(『空石日記』卷一八)

八月二十六日、村北海の前で月琴の技を披露する。

○ 北海來、圭師鼓琴。(『空石日記』卷一八)

閏八月一日、長崎広徳院義先と二人の者が来る。

○ 長崎廣徳院義先与二人來。圭師所寓也。草卒供酒、作小絶以謝。

〔空石日記〕卷一八

閏八月七日、村北海と一緒に胡琴と月琴を弾く。

○ 夜、北海来、彈胡月琴如例。〔空石日記〕卷一八

※ 『昭陽先生文集初編』卷一一「復山土繫」に「時北海与圭師以清平調詞合越天楽節、名之曰、『作之礼楽。』琴声歌声繫興。」とある。

閏八月十三日、崇福寺の使者から野が施された帳面をもらう。

○ 崇福寺使使以熬麩一搯問候、且餞圭師以二筆哇本。〔空石日記〕卷一八

閏八月十八日、荷塘の旅立ちの日が近づいてきたため、昭陽は贈り物として『近稿抄』と跋文を書き始める。

○ 圭上人告帰、筮定念三起程。乃書『近稿抄』、書跋以贈。〔空石日記〕卷一八

※ 『近稿抄』について、『昭陽先生文集初編』卷七「題近稿抄首」に「其間所作詩文多言涉上人者、余欲以為別後惠思之地、抄出而手写之、以授其懷。」とある。

閏八月十九日、亀井昭陽は『近稿抄』を書き続ける。

○ 走忠三、幸三於今宿、報圭上人起程。晝夜寫近稿抄。〔空石日記〕卷一八

閏八月二十一日、昭陽は荷塘のために宴会を開き、『近稿抄』六枚と詩文六枚を贈る。

○ 丑夜起、寫『近稿抄』六枚、贈詩文六枚、細字合十二枚大成。自十八日、日夜不停揮、宵不寐。此日飲書生、張別筵。〔空石日記〕卷一八

閏八月二十二日、昭陽から文書や詩や画をもらい、自分のために開かれた送別会に参加する。

○ 作語二首、書院贍上人。又作詩二首、寫仙厓絹画以贍。(中略) 此日、離筵食書生、又設別筵。北海、嬰武来、酒中召飲。生大歡呖歌舞。宴散、与内氏聽月琴於書房、泣而眠。〔空石日記〕卷一八

閏八月二十三日、江戸に向かう途中、雲来に立ち寄る。一方、昭陽と妻の伊智は荷塘のことを恋しく思つて堪らなかつた。

○ 東方未明、圭上人起行。余与内氏、長婿、送至橋上。義也、鐵也、世也、宗也、以奴萬婢未送之。雲来、友錦、龍玄、冲要、玄民、密之助、俊民、高庵、賢次郎、環九書生送。余既帰、無聊甚。酒亦作惡、吞白湯、吐宿酒。彷徨庭園、屢入書房、不勝愴焉。挂其所贍宗也唐团扇於孝鳥像前、又抽其所寫典票、医票玩之。食不下喉、至口口粥歡之。(中略) 北海以肴来、自割烹慰余。小酌而被圭師所常被被而眠。此日力瘁、百事都懶。(中略) 夜、待書生送者、不帰乃眠。二更、七生帰。聞安穩至雲来、心降。夜夢屢驚、内氏奪魄如痴。〔空石日記〕卷一八

閏八月二十四日、昭陽は荷塘の書簡を見た後、心を動かされて眠れなくなる。

○ 圭公束来、口演平安にて其迄九ツ時過着仕候。御放念被下度候。申上皮事沢山御座候得共、唯感涙耳。而下筆難致、又涙斗筆も動不申。頓首、血涙。時内氏方燈下印地藏尊、余見口而寤、遂不寐。至丑夜凡三換臥処輒転反側、生来無此離恨也。〔空石日記〕卷一八

閏八月二十五日、日田に着いたと思われる。

○ 是日、天時曇、慮圭師行路。然終日不雨、意当無恙達日田。〔空石日記〕卷一八

閏八月二十六日、号を一溪から一圭に改め、広瀬淡窓を訪れる。一

方、昭陽は荷塘が雨に遭わなかったことを、嬉しく思う。

○ 釋一圭（一溪也）來訪。（『遠思樓日記』卷四）

○ 朝雨、皆喜圭師不遇雨也。筮亦奇。（中略）鵬漠貽松草、哀不泊圭師。草贈圭序、夜了、登牘及詩。（中略）午酌、宗也鼓月琴。（中略）宗也云、「児、夕夕夢在尊師君側。」（『空石日記』卷一八）

閏八月二十七日、昭陽が荷塘のことを心にかける。

○ 登贈圭師序句点。（中略）与内氏夜坐待月、圭師故事也。（『空石日記』卷一八）

閏八月二十八日、淡窓のところに泊まりに行く。また、胡琴と月琴の技を披露する。一方、昭陽は荷塘を遠くまで送らなかつたことを残念に思う。

○ 一圭來宿。（予將聽其華音、故館諸家。）（中略）夜聽一圭彈月琴、胡琴。（『遠思樓日記』卷四）

○ 鶴頻飛舞、与内氏歎圭公不迨此。作題圭公扇詩。橋太來延余、至漬物屋飲祝酒、將出、忽感圭公不送、途上得二三句。（『空石日記』卷一八）

閏八月二十九日、広瀬旭莊に唐音を教える。一方、昭陽一家はまた荷塘のことを心にかける。

○ 聽謙吉學華音於一圭。（『遠思樓日記』卷四）

○ 作寄圭公古詩、登稿。（中略）内氏謂婢曰、「婢不亦善乎、自圭公婦、唯追慕、而未嘗曰災星去也。既而抱女孫繞橘樹下、唱大曲一二句、曰、「渾是唐人癡語。婢自後呼曰、「嗟、主母公嘲主父公之尊客了。」内氏語塞曰、「棄我去故也。」（中略）月公謂圭公、「可慨哉、我藩之無若斯人乎。」（『空石日記』卷一八）

九月一日、昭陽は遠山荷塘に泊ませた書齋をもとの形に復元する。

○（欄外注）「自圭公去、余不忍移葉書房、至此月、簫既改、不忍當有終、乃始復我書房。」（『空石日記』卷一八）

九月二日、昭陽は荷塘のために、小曲、序文、題辭と文書を書く。一方、門生の錦龍は荷塘のために麻繩を購入する。

○ 為圭公揮洒小曲、贈序、金印題言。為之不午飲、腰痛。（中略）作与圭公牘、贈稿。錦龍為圭師沽麻繩、得之博多而歸。有醉色、誇口、「奔此命者數人、都不索得、且価登儲買四百文、我折之三百非他人所能。」（『空石日記』卷一八）

九月三日、昭陽は荷塘に書簡、詩と日記を書く。

○ 写与圭公牘、詩、日記抄、凡半截三枚。（中略）夜、作与圭公、廉卿、謙吉国字柬。鷄鳴起、又作柬至曉。（『空石日記』卷一八）

九月四日、淡窓に『韻鏡』を紹介する。一方、昭陽は使いを出して荷塘に贈り物を届けさせる。

○ 從一圭聽『韻鏡』說。（『遠思樓日記』卷四）

○ 講前、發奴万吉走日里、貽圭公以寿泉十包（包直八十余、南金小々過）、松葦三百文、小菊（四帖）、銀二封（孝鳥奠、合拾四錢）。内氏貽方金為縐紗袱（少梨蘭）。世、宗、銀各一星、別麻繩（十四尋）、蛮橘二漬瓶。（中略）午食後、思圭師甚無聊、飲濁酒散遣。（『空石日記』卷一八）

九月五日、昭陽は荷塘が自分の手紙を読んだかどうかを心配する。

○ 屢与内氏言圭公當披余柬悲喜。夜案至于後、思圭公不寐。（『空石日記』卷一八）

九月六日、昭陽はお酒を飲んだ後、また荷塘のことを心にかける。

○ 夜、過子飲卧。枕上思圭公、得句不成篇。（『空石日記』卷一八）

九月九日、荷塘からの返札が昭陽のもとに届く。昭陽は荷塘の返信と日記を読んだ後、大変感動する。

○ 与長婿飲。北海来、大鼓月琴、唱小曲大曲、閉目如圭公猶在。晚、万吉至自日田。圭公、廉卿、謙吉返東至。圭公惠絲烟六塊於余与内氏、佳半紙二束於二兒。及廉卿妻、貽果一函於二女。余与内氏讀圭公返東及日記抄、目尽腫、廢百事寐。（『空石日記』卷一八）

九月十日、昭陽は荷塘の夢を見る。

○ 四更卧。思圭公不寐、寐即覺。夢作懷上人辭賦一章、甚自得。覺只録二句。（『空石日記』卷一八）

九月十三日、淡窓のところで開かれた宴会に参加する。一方、昭陽は荷塘のために詩を贈りたいが、書き終わらなかった。

○ 夜小酌樓上。陪座者、釋一圭、謙吉、頼母（中略）、近四更而散。是夜初陰後晴。（『遠思楼日記』卷四）

※ 宴會に淡窓は詩を詠じた。『遠思楼詩鈔』卷下に「九月十三夜賞月。恒眞卿、山子蘭、重文卿、井希忠、玉元純、松霞門、草元秀、釋一圭、龍潭、秀諦、達圓、圓暉、周邦、同會。」とある。

○ 昨来、思寄圭公詩、以抄疏劇甚不能成。（『空石日記』卷一八）

九月十四日、淡窓に反切を教える。

○ 學切音法。（『遠思楼日記』卷四）

九月二十五日、隈町に行く。

○ 一圭之隈町。（『遠思楼日記』卷四）

※ 隈町は現在の分県日田市街南部の隈地区一帯にあたる。

九月二十七日、昭陽は荷塘からもらった煙草を吸いながら、彼のこ

とを思う。

○ 是夜、圭公待月出乎否。吸其所貽烟、視夜雲黒、唯東雲微白、知月之出也。（『空石日記』卷一八）

十月四日、荷塘が日田から送った書簡が昭陽のもとに届く。

○ （同年十月五日の条）昨夜、圭公東至自日田。（『空石日記』卷一八）

十月八日、昭陽は荷塘と淡窓に書簡を書く。

○ 夜『周礼』會後、作与圭公及廉卿東。（『空石日記』卷一八）

十月九日、昭陽は二人の弟子を遣わし、荷塘に贈り物を届けさせる。

○ 使錦龍、要如日田、以圭公婦迫也。餞以娟絮衣一、果子一函、金山鼓一捲。内氏餞之領巾足衣。（『空石日記』卷一八）

十月十日、咸宜園に戻る。一方、昭陽が見舞いに行かせた弟子が淡窓のところに着く。

○ 亀井先生使僧錦龍（柳川人）、岸要人（伊豫人）來問一圭。相見留宿。（置東塾。）一圭自隈町歸。（『遠思楼日記』卷四）

十月十一日、宴会に参加する。

○ 飲錦龍、要人酒。一圭、謙吉、頼母陪座。（『遠思楼日記』卷四）

十月十三日、隈町に行く。荷塘の返信と日記抄及び淡窓の手紙が昭陽のもとに届く。

○ 一圭之隈町。（『遠思楼日記』卷四）

○ 要、錦竜婦自日田、圭公返東、日記抄及廉卿東至、酒犒之。（『空石日記』卷一八）

十月十五日、隈町から戻る。

○ 一圭自隈町歸。〔遠思楼日記〕卷四)

十月十六日、淡窓、館林清記と酒を飲む。

○ 餞一圭小酌於樓上。館林清記亦會至。入夜而散。〔遠思楼日記〕卷四)

※ 館林清記について、『懐旧楼筆記』卷三に「此春(寛政五年)ヨリ、文の進ノ子清記、來リテ予カ家ニ寓セリ。句讀ヲ予ニ授カリ。且筆硯ヲ同シクンカ爲ナリ。清記予ヨリ若キコト五歳ナリ。」とある。

十月十九日、江戸に向かう。

○ 一圭東行。〔一圭以四年前去塾、不期再會。今至東都、恐無再見之期、不堪悵然、作文以送之。彼風氣才藝、實後進之矯々者。豈爲叢林之秀乎。庶无疾病以及成名。〕〔遠思楼日記〕卷四)

十月二十八日、広瀬旭荘は淡窓と荷塘の書簡及び贈り物を昭陽に渡す。

○ 謙吉朝見、致廉卿、圭公東。知圭公以十九日發日田也。公貽烟六塊、烟匣二枚、及奠合作畫於神童。謙吉貽烟四塊、水精餅、鱈鱈。〔空石日記〕卷一八)

十一月十一日、昭陽は荷塘への書簡を書く。

○ 作与圭師東。〔空石日記〕卷一八)

十一月二十一日、昭陽はまた荷塘への書簡を書く。

○ 又作与圭師短牘。〔空石日記〕卷一八)

十二月五日、昭陽に書簡を書く。

○ 見同年一月二十五日の条。

十二月二十五日、豊後高松から出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ (欄外注) 圭上人豊後高松之書至。本月初五所發。〔空石日記〕卷一八)

文政八年 乙酉 一八二五 三十一歳

一月二日、昭陽は荷塘への書簡を書く。

○ 作与圭公東、付之。〔空石日記〕卷一九)

一月十五日、九州から離れ、本州に向かう。

○ 見同年二月一三日の条。

一月二十六日、昭陽は荷塘が訳した唐人書簡を読み、抄録する。

○ 夜始讀圭公釈唐人書牘、抄録。〔空石日記〕卷一九)

一月二十九日、大阪から、昭陽に書簡と贈り物を送る。

○ 見同年二月二五日の条。

二月一日、淡窓を経由して、荷塘の書簡と贈り物が昭陽のところへ届く。

○ (欄外注) 圭上人東至豊後府内、二封、廉卿轉達、寄贈簪於世、宗。〔空石日記〕卷一九)

二月十三日、昭陽は佐藤茂右衛門の書簡から一月十五日に荷塘が本土に向ったことを知る。

○ 佐藤茂右(豊後府内人)東告、「圭師以正月十五日出帆。」(乃圭師所越年之人也)〔空石日記〕卷一九)

二月二十五日、荷塘が書いた書簡と贈り物が昭陽のもとに届く。

○ 圭上人正月廿九日東、日記抄、至自浪華。貽余杯、世簪、宗雙簪
髮飾二。(『空石日記』卷一九)

二月二十六日、荷塘の日記を収納するために、昭陽は新しい収納用の袋を作る。

○ 又做圭公書翰袋。圭公屢録日記見寄、乃又欲做一袋、藏其日記、求前所寄日記二冊、搜索不得。乃知此袋是文房中之一大政要也。猶當逐物實幾多袋也。嗟々、亦伯子之感自出者。(『空石日記』卷一九)

二月、淡窓に門生二人を紹介する。

○ 入門年月日	住所	氏名	紹介者
文政八乙酉	豊後大分郡府	阿部俊吾	釋一圭
二月廿八日	内領荻原村		
文政八乙酉	豊後高松原浦	阿部賢吾	釋一圭
二月廿八日	村		

(『入門簿』卷十七)

三月十日、左大夫が荷塘の日記を昭陽に返す。

○ 左大夫来、返圭師日記。(『空石日記』卷一九)

三月十五日、名古屋に着く。

○ 見同年七月七日の条。

五月十一日、昭陽の娘、宗が月琴を弾き、荷塘のことを懐かしむ。

○ 去年今日、圭公来、始聴月琴。女宗為左、宰絃以思旧。(『空石日記』卷一九)

五月十六日、江戸に着く。昭陽に書簡を送る。

○ 見同年七月二十六日の条。

七月七日、名古屋から出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ 圭公三月十五日尾州之東至。(『空石日記』卷二〇)

七月二十六日、江戸から出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ 夜、圭師東至自江戸。五月十六日發也。奠海沈、冥紙。(『空石日記』卷二〇)

※ 「海沈、冥紙」を送ったのは、文政八年二月十七日に亡くなった昭陽の長子、義一郎と同年四月三日に亡くなった甥の山口士繫を弔うためである。

七月二十七日、昭陽は荷塘からの書簡を日付の順に並べる。また、荷塘が無事に江戸に到着したことに對し、祝杯を挙げる。

○ 檢圭師別來書東發達月日、書列之、又稽其日記抄、將為其無恙達江戸、祝舉一杯。左大夫来、乃呼鉄也、要韋甫飲。(『空石日記』卷二〇)

○

七月二十八日、昭陽は荷塘への書簡を書く。

○ 構与圭公弟一牘。(『空石日記』卷二〇)

八月九日、昭陽は荷塘の日記抄を読みつつ、彼のことを恋しく思う。

○ 線姻畢飲了。自客秋有圭師大呪、他亦有貽。近絶不得相思之贈故。(中略) 玩圭公日記抄。(『空石日記』卷二〇)

八月十日、昭陽は引き続き荷塘の日記抄を読み、山口士繫への書簡を写し、荷塘に見せようとする。

○ 玩日記抄。(中略) 晨也、写与士繫四牘、呈圭公故。
※ 士繫は亀井昭陽の甥、山口士繫のこと。(『空石日記』卷一九、

文政八年四月二八日の条に「嗣君以四月三日没了」とある。

八月十一日、昭陽はまた荷塘への書簡を書き、財物を送る。

○ 作呈圭公外白、不及登稿、乃揮。(中略)一醉卧而起、又作外白之三揮。天晚、灯下又作其四(中略)貽圭公紫金苔二包及方金、折相思草、賀東達也。(『空石日記』卷二〇)

八月十三日、昭陽は荷塘のことを思い、詩四首を作る。

○ 作詩絶二、古二、皆思圭公也。(『空石日記』卷二〇)

八月十四日、昭陽の子、鉄次郎が荷塘のことを思う。

○ 午飲時、鉄也日、「去年今日、圭公適池水、寓於博多。」(『空石日記』卷二〇)

八月十七日、昭陽は鉄次郎に、荷塘からもらった冥錢を義一郎の墓の前で焼かせる。

○ 使鉄也焚圭公貽冥紙於蓬洲冢前。(『空石日記』卷二〇)

※ 蓬洲は昭陽の子、義一郎の諱。

八月二十二日、昭陽は昨年この日に、荷塘を送別するために、開いた宴会のことを思い出す。

○ 去年今日、餞圭公。(『空石日記』卷二〇)

八月二十三日、昭陽は昨年この日に、荷塘と別れたことを思い出す。

○ 去年此日、圭公別去。(『空石日記』卷二〇)

八月二十四日、昭陽は荷塘と蒲元凱に書簡を書く。

○ 作与圭公、元凱二牘。(『空石日記』卷二〇)

八月二十六日、昭陽はまた荷塘に書簡を書く。

○ 作与圭公外白。(『空石日記』卷二〇)

八月二十六日、昭陽は昨日の書簡に句点を付ける。

○ 登外白点。(『空石日記』卷二〇)

八月二十八日、昭陽は荷塘と蒲元凱に贈る詩を書く。

○ 揮贈圭公、元凱詩。(『空石日記』卷二〇)

八月二十九日、昭陽は荷塘に書簡と詩を書く。

○ 講後、揮与圭公牘及外白及歌行。(中略)又作与圭公別啓。(『空石日記』卷二〇)

九月十日、昭陽は荷塘と蒲元凱に書簡を書く。

○ 作与圭公、元凱牘、登句点。(『空石日記』卷二〇)

九月二十三日、昭陽は荷塘に書簡を書く。

○ 講後、作与圭公牘、登句。(『空石日記』卷二〇)

十月十五日、昭陽に書簡と贈り物を送る。

○ 見同年十一月一九日の条。

十一月十五日、昭陽に書簡及び大窪詩仏の詩集を送る。

○ 見文政九年二月一三日の条。

十一月十九日、十月十五日に送った書簡と贈り物が昭陽のもとに届く。

○ 圭上人書(十月十五日)。贈簪飾二簪三於二女。奠浅草苔於蓬伯

子。(『空石日記』卷二〇)

※ 蓬伯子は義一郎のこと。

十二月六日、『海録』の作者山崎美成と長崎の清人の話をする。

○ 一圭が話 長崎清人の、常に彼地の言語聞覚えて、和語をつかふ
(後略) 『海録』卷十三)

十一月二十日、二月二十四日に出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ (欄外注) (圭上人二月廿四日、京師東來。為全惠乞金扇詩。)
『空石日記』卷二〇)

この年、江戸に着いた後、大窪行、宮澤雉に歓待され、本所表町、横町の辺りに住む。『西廂記』、『琵琶記』をはじめ、あちこちで小説の講義をする。また、職人を雇り、月琴と提琴を作らせ、長崎から取り寄せたものだと言い、買いたい人に売る。

○ 年三十一、始來江戸。寓於本所、與余居相距不甚遠。故余知師最先。余與大窪行、宮澤雉諸友設席延致、受『西廂』、『琵琶』二記。先是江戸文人無精於傳奇者、何況詞曲乎。若摘月琴者、絶不見其人。而師兼能之、竟以是名家。人亦以是稱之。(『梁我室遺稿』卷三「荷塘道人圭公伝碑」)

○ 江戸に來りて本所表町横町にすめり、一人比丘尼を具したり。是は彼が妻なり。長崎妓家の女なりとぞ、これをつれて彼處を走りしにやしらず、されど容儀もよからず、ことに一圭よりは年上と見へたり。住所は稱念寺行者と云ふものにして家を借たり、月琴を引くことは其の比丘尼にまなびしなるべし。『西廂記』を講じ、所々に行て小説をよくめり、また職人をやとひて月琴、提琴を注文して、舶來のもののように作らせて、崎陽より取寄たるよしいひて望みの人に售る。(『増訂武江年表』卷之八)

文政九年 丙戌 一八二六 三十二歳

一月十四日、昭陽への書簡が届く。

○ 圭公、元凱、道林東至。(『空石日記』卷二一)

一月、昭陽に二通の書簡を出す。

○ 見同年三月二日の条。

二月一日、昭陽は荷塘に書簡を書く。

○ 艸復圭公牘。(『空石日記』卷二一)

二月三日、昭陽は荷塘に書簡と二首の詩を書く。

○ 登峇圭公牘一首及詩二首。(『空石日記』卷二一)

二月四日、昭陽はまた荷塘に書簡を書く。

○ 艸峇圭公牘。(『空石日記』卷二一)

二月九日、昭陽は荷塘と塩谷甲蔵に書簡を書く。

○ 揮峇圭公、甲蔵三牘。(『空石日記』卷二一)

※ 甲蔵は塩谷甲蔵のこと。

二月十三日、昨年の十一月十五日に出した書簡と大窪詩仏の詩集が昭陽のもとに届く。

○ 圭上人、十一月十五日東至。詩仏詩一冊來。(『空石日記』卷二一)

三月十九日、昭陽に二人の女性を紹介する。

○ 佐藤茂右衛門、拉女阿与利來(豊後府内人、子徳也、号百花園。女名順、字至氷、号菁々)、圭師紹介。(『空石日記』卷二一)

三月二十二日、一月に出した二通の書簡が昭陽のところに届く。

○ 圭師〔正月二束〕、碩齋東至。〔『空石日記』卷二一〕

三月二十三日、昭陽は荷塘に書簡を書く。

○ 作報圭師牘揮。又揮詩二首。〔『空石日記』卷二一〕

三月二十八日、昭陽に書簡を出す。

○ 見同年七月十一日の条。

七月十一日、三月二十八日に出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ 道林東至。中有圭師〔三月廿八日〕、碩齋〔四月十七日〕、元凱東〔四月十五日〕〔『空石日記』卷二二〕

九月四日、昭陽に出した手紙が届く。

○ 圭公六月念東至。〔『空石日記』卷二二〕

九月十一日、昭陽は荷塘に書簡を書く。

○ 夜作復圭公束。絨則丑時。〔『空石日記』卷二二〕

九月二十一日、昭陽は荷塘への書簡を書き、西瓜の種を送る。

○ 講後、作与圭公束。送西瓜子。〔『空石日記』卷二二〕

九月、『福惠全書』の講義を行う。

○ 一圭福惠全書口義 文政九年九月、荷塘一圭の福惠全書講義を宅にて催せしが、松田多助、中井準之助、榊原長之助、鹽田又之丞、森九郎左衛門同じく席に會す、その時の紀聞を反故中に得たるが、その中聊捨難きを録す（後略）〔『海録』卷十九〕

十月二十六日、左大夫が荷塘の文書を読み、昭陽を訪れ、酒を飲む。

○ 左大夫点圭公文来、飲。〔『空石日記』卷二二〕

十一月二十五日、昭陽は蒲元凱と荷塘に書簡を書く。

○ 作報元凱、圭公束。〔『空石日記』卷二二〕

十二月二日、昭陽に書簡を出す。

○ 見文政十年一月一八日の条。

文政十年 丁亥 一八二七 三十三歳

一月十八日、十二月二日に出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ 圭公束至〔臘二日〕。〔『空石日記』卷二三〕

一月二十一日、昭陽は荷塘、蒲元凱と柳沢碩齋に書簡を書く。

○ 夜、作与圭公、元凱、碩齋東。〔『空石日記』卷二三〕
碩齋は柳沢碩齋のこと。

三月、昭陽に書簡を出す。

○ 見同年五月二七日の条。

四月、昭陽に書簡を出す。

○ 見同年五月二七日の条。

五月、昭陽に書簡を出す。

○ 見同年五月二七日の条。

五月二十七日、三月、四月、五月に出した書簡が昭陽のもとに届く。

○ 圭公三月、四月、五月東至。〔『空石日記』卷二三〕

閏六月七日、昭陽は荷塘に書簡を書き、『琵琶記』を送る。

○ 作報圭公柬、寄『琵琶記』【案、『琵琶記』は『琵琶記』の誤写だと考えられる。】（『空石日記』卷二二）

八月十四日、昭陽への書簡が届く。

○ 圭上人、道林、三藏東来。（『空石日記』卷二四）

文政十一年 戊子 一八二八 三十四歳

一月二十一日、昭陽への書簡が届く。

○ 圭師、碩齋東来。（『空石日記』卷二五）

一月二十七日、昭陽は荷塘に書簡を書く。

○ 作復圭師細翰。（『空石日記』卷二五）

十一月七日、昭陽への書簡が届く。

○ 圭上人、碩齋東至。（『空石日記』卷二六）

文政十二年 己丑 一八二九 三十五歳

十二月六日、書簡と贈り物が昭陽のもとに届く。

○ 圭上人柬、致『笑林廣記』。且送水滸錦繪、烟袋地十枚於世、宗。（『空石日記』卷二八）

天保二年 辛卯 一八三一 三十七歳

三月二十五日、やはり風邪に罹ったため、善庵が見舞いに来る。

○ 三月念五、余叩上人山房。時上人氣宇不佳、似染時行風者。其夕始就病葺。（『昭陽先生文集二編』卷三「圭公終記、訳朝川鼎東」）

四月中旬、吐血したため、善庵が数名の医者に診察させる。

○ 及四月中旬、痰血咳嗽、余以為勞瘵之漸、乃招医生数輩、殫心力以療視之。（『昭陽先生文集二編』卷三「圭公終記、訳朝川鼎東」）

五月六日、症状がさらに悪化する。善庵に亀井昭陽から借りた『西廂記』を返させる。

○ 病勢殆劇。以後事遺囑余。言及老兄、使余發訃狀、且返所借『西廂記』、赴告有松岡氏在。（『昭陽先生文集二編』卷三「圭公終記、訳朝川鼎東」）

六月二十六日、詞を書く。

○ 歿前四五日、援筆而書曰、「昨夜虚空映落腮、木人石女歌唱耳、山非山、水非水、所得一生無大小、嗤々。看々東海鳳王兒、今日拖泥帶水時、鴨脚山房荷道人臨死戲書。」（『昭陽先生文集二編』卷三「圭公終記、訳朝川鼎東」）

○ 卒前五日、力起端坐、援筆書小詞、以訣諸友。字字活動、如無病者。（『棠我室遺稿』卷三「荷塘道人圭公伝碑」）

六月二十七日、熱がひどく、うわごとを言う。善庵に呼び掛けられ、また意識を取り戻す。

○ 没前四日、熱氣盛、少有譫語。余厲色曰、「丈夫臨死、其有為胡言妄語乎、況在禪門、何等不了。」上人開眼曰、「咄々、可恥也、可慨也、坐禪三年、精修未遂、若涉五年、豈取如是人言乎。」因自矜氣精、淚簌々而落。（『昭陽先生文集二編』卷三「圭公終記、訳朝川鼎東」）

六月二十八日、症状がさらに悪化し、目が見えなくなり、決別として琴を一回弾く。そして、亡くなるまですっと経文を唱え続ける。

○ 没前三日、目無見也。引月琴於病床、臥弾「流水」曲、音節不少差也。弾罷、使侍病之人又奏「流水」者再矣。乃解其顔而曰、「好。」

蓋永訣之意也。自此、只念地藏至死、精神不乱、定資美談。(『昭陽先生文集二編』卷三「圭公終記、詠朝川鼎東」)

○ 越二日、病彌滋甚、目無見也。猶引月琴於病床、臥彈「漫板流水」一回。音節調和、無異平常。又使侍病之人奏吳歌一闕、破顏微笑曰、「好好。」蓋永訣之意也。(『樂我室遺稿』卷三「荷塘道人圭公伝碑」)

七月一日、江戸で示寂する。

○ 天保二年辛卯秋七月朔日、示寂於鴨脚山房。年僅三十七、葬淺草稱念寺。(『樂我室遺稿』卷三「荷塘道人圭公伝碑」)

参考資料

○ 『樂我室遺稿』卷三(崇文叢書第二輯之五二、崇文院、一九三二年三月發行)

○ 『淡窓日記』(增補『淡窓全集』中卷所収、思文閣、一九二六年十一月十日發行、一九七一年二月一日復刻)

○ 『入門簿』(增補『淡窓全集』下卷所収、思文閣、一九二七年一月三〇日發行、一九七一年二月一日復刻)

○ 『南柯一夢』天の卷(武谷祐之著、井上忠校訂、『九州大学九州文化史研究所紀要』第十号所収、九州大学九州文化史研究所、一九六三年十月發行)

○ 『懷旧樓筆記』(增補『淡窓全集』上卷所収、思文閣、一九二五年一月二〇日發行、一九七一年二月一日復刻)

○ 『増訂武江年表』(斎藤月岑著、国書刊行会、一九二五年一月十日發行)

○ 『空石日記』(亀井南冥昭陽全集』第七卷所収、葦書房、一九七九年二月發行)

○ 『昭陽先生文集初編』(亀井南冥昭陽全集』第八卷下所収、葦書房、一九八〇年九月發行)

○ 『遠思樓日記』(増補『淡窓全集』中卷所収、思文閣、一九二六

年十一月十日發行、一九七一年二月一日復刻)

○ 『遠思樓詩鈔』(増補『淡窓全集』中卷所収、思文閣、一九二六年十一月十日發行、一九七一年二月一日復刻)

○ 『海録』(山崎美成著、国書刊行会、一九一五年十一月版)

○ 『昭陽先生文集二編』(亀井南冥昭陽全集』第八卷下所収、葦書房、一九八〇年九月發行)